

一

次の二つの文章を読んで、後の問いに答えなさい。

著作権上の都合により文章の掲載はできません

著作権上の都合により文章の掲載はできません

著作権上の都合により文章の掲載はできません

文章 2

みなさんは、「大人になることは、とてもむずかしい」と思っていますか。私の答えは、いたってシンプル。「大人になると決意したときが、大人です。」

大学の新生に、こう質問したことがあります。

「あなたたちは、自分のことを大人だと思いますか？」

すると、一〇人中八人が「大人ではない」と答えるのです。それで、もうひとつ聞きました。

「じゃあ、四年生になったときの自分は、大人になっていると思いますか？」

驚いたことに、これにも十中八九「大人になっていないと思う」と答えるのです。結局、「自分は大人になれない」と思っているんですね。

たしかに、一九七〇年代後半に②「モラトリアム」という言葉が広がってから、大学生を大人と認めにくい雰囲気、社会にできてしまいました。しかし、これでは、いつまでも大人になれません。なぜなら、「大人になる」というのは、まず自覚の問題だからです。「この状態は大人かどうか」と頭で判断するような受動的な作業ではありません。えいっと助走をつけてジャンプする、4な体験だからです。社会の側も、そのような「まなざし」で大学生を見る必要があるでしょう。

問題は、どのような大人になるかです。どのような「問い」をもつて生きるか、といつてもいいでしょう。私は、「市民として生きる」という視点を、あげておきたいと思います。この定義もむずかしいのですが、ここでは、「立場のちがう者どうしが(c)キョウセイすること」と考えてください。村瀬さんが、「三歳を超えると「(Y)家の世界」から「法の世界」に入るというのも同じです。「法」というのは、「立場のちがう者どうしがキョウセイする」ためのルールだからです。

(串崎真志『悩みとつきあおう』より一部改)

問一 ㇀(a) ㇁(c) のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 ㇂(X)・㇃(Y) の漢字の部首の名称を、それぞれ答えなさい。

問三 二カ所ある ㇄ には、「子どもが成長して、頼り切った状態から独り立ちすること。」という意味の言葉が入る。その言葉を、ひらがな五字で、自分で考えて答えなさい。

問四 ㇅ に入る漢字二字の言葉を、自分で考えて答えなさい。

問五 ㇆ に入るカタカナの言葉を、文章1および文章2から探し、抜き出しなさい。

問六 ㇇ に入る漢字三字の言葉を、自分で考えて答えなさい。

問七 ー①について、「あした」と「あしゝた」の違いを、文章1のAとBの二人は、どのように考えているか。五十字程度でわかりやすく説明しなさい。

問八 ー②について、ここでは、難しい「モラトリアム」という言葉が用いられているが、この言葉の、この部分での意味はどのようなことか。著者の主張や、前後の文脈から判断して、最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア 大学生ならば、大人になっても、果たさなければならない責任を、まだ許してもらえると考えること。
- イ 大学生は、働いて税金を納めてはいないので、正式な大人としては認めないようにすると考えること。
- ウ 多くの学生が大学まで進学するような時代となり、大学生の社会的役割は相対的に低いと考えること。
- エ いろいろな考え方が存在し、大学生を大人として扱うかどうかの、判断する基準がないと考えること。

問九 文章1か文章2には、次の一文が抜けているが、元に戻す場所はどこか。元に戻す場所の、直後の五字を抜き出しなさい。
元に戻す一文……なるほど、日本の法律（民法第三条）では、たしかに彼らは成人ではありません。

問十 文章1と文章2について、人が大人になるためには、具体的にどのようなことが必要であるといっているのか。それぞれ二十字以内でわかりやすくまとめなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

子どもはおとなの仕事に憧れをもつものだが、正九郎も日頃から、自転車のパンクを直してみたいと願っていた。自転車屋の金さん夫妻が留守の日、ついに正九郎の願いが実現する時がきた。店員の「やあ公」を誘い、びわの束を食べに行かせることで店から遠ざけ、正九郎と加平は二人きりで店番をすることとなった。

目的のものが、やってきました。それは、洋服をきて、皮のかばんを持った、どこかのおじさんでした。おじさんは、パンクした自転車を、日おおいの下に立てておいて、汗をふきながら、店へはいつてきました。

「おーい、坊。家のもんはいないか。」

おじさんは、ふたりを自転車屋の子と、まちがえたのです。こいつは、ふたりにとって好都合でした。

「ンにや。ンでも、おれたちでも直せる。」

と、加平君がいました。

なお都合のいいことに、おじさんはくたびれていたとみえて、ふたりに自転車をまかせたきり、上がり(ま)がりがまちに、あおむけにねころんで、目をとじたのです。だれにも見ていられないほうが、仕事はいいし、またそれだけのしめる。ひとりでたべるほうが、こちそうがうまいのと、同じことです。

ふたりは、1して、修繕にとりかかりました。まったく、夢のような気持ちでした。タイヤをはずして、チェーンに空気を入れ、赤ん坊の腕(うで)のように、やわらかくふくれたチェーンを水にくぐらせ、あなのあるところをさがします。プクプクプクと、小さい泡の出るところを見つけます。これだ。

よく切れる長いはさみで、つぎにするゴムを、ジヨキジヨキと切ります。はじめは、カードのように四角に切つて、つぎに、角(かど)を

をまるくします。それから人差し指をゴムのりの罐(かん)の中につっこんで、どろりとした、よいにおいのするやつを、つぎのゴムと、チェーンのあなのあるところに、2とぬります。そうだ、こんな気持ちのいいことが、またとあるものではありません。

はじめのうちは、あまり3していたので、四つの手が、ぶつかりあつてしかたがなかったが、そのうち、ほんものの自転車屋の子どものように、4と、うまくやることができました。ですが、もちろん、正九郎君のあらいたでの白ズボンが、見る見るきだなくなっていくことは、やむを得ませんでした。よいことがあれば、すこしぐらいは悪いことも、がまんしなければなりません。

でも、こんなことになろうとは、思ってもいませんでした。修繕が終わつて、正九郎君が空気入れで、タイヤの中に空気を送っていたとき、急に空気の抵抗がなくなつて、ポンプがきかなくなつてしまいました。五、六回、おしたり、引きあげたりしてみましたが、水の中へほうをさしこむようなものです。

正九郎君は加平君と、顔を見合わせました。たいへんなことをしてしまったという気持ちが、おたがいの顔にあらわれていました。正九郎君は、目の前が、暗くなつてきました。そして耳の中は、波がおしよせたように、ザアザアと鳴りだしたのです。

5、なんにも知らないお客さんが、十銭玉を加平君の手ににぎらせて、自転車に乗つていつてしまうと、ふたりはポンプの(3)パツンという、大きな壁(かべ)のような罪に、面とむかわねばなりませんでした。不幸というものは、こんなくあいにやつてくるものだということを、ふたりはいまさらのように感じました。

「おら、知らんじや。」

と、加平君がいました。

①加平君は、やつぱり他人です。正九郎君は、なきだしたくなりました。でも、ないたとて、どうにもならないと考えたほど、その罪は大きなものに思われました。それは、石のようにのしかかつてきて、かれの心をおさえつけました。騎馬戦(きばせん)の馬になつていて、おおぜいの下じきになつたときみたいな、苦しいおされたような感じが、みぞおちのあたりに感ぜられました。

もちろん、加平君がこれおそろしい過失を、やあ公に知らせるものだと、正九郎君はあきらめていました。ところが、予想がちがつていました。やあ公が、腹いっぱいいたべた証拠に、げつぷをしながら帰つてくると、②加平君は、お客さんがおいていった十錢玉をわたして、かんたんにわけを話したきり、なんにもいわないのです。

けれども正九郎君は、むしろ話してもらったほうが、気持ちがよかった。そうすれば、そこで「わあ」となきだしてしまうこともできたのです。

罪をかくしておくことは、なんと苦勞のいることでしょう。ふたりは空気入れの方を、あまり見てはいけないのです。さもないと、やあ公がそれを、あやしみはじめるかもしれないからです。また話を、やあ公の好きなものだけに、限らなければなりません。そうでないと、いつ話が、空気入れのほうに、落ちないとも限らないからです。にもかかわらず正九郎君は、しばしば空気入れの方を、ぬすみ見ないではおられませんでした。気になってしかたがありません。いまにも空気入れが、ひとりで歩いてきて、「正九郎が、ぼくをこわした。」と、しゃべりだしそうなのです。

いちばんいい方法は、はやく空気入れのいないところへ、いつてしまうことです。わたしたちの良心が、苦しくてたまらないときは、その良心を苦しめるものが見えないところへ、いつてしまうのが、いちばんよいということを知っています。

ふたりは、やあ公が十錢玉をいつもの手提金庫に、チャリンとほうりこんだのを（ X ）に、にげだすような気持ちで、店を出ました。

もうここへは、（ Y ）こないと、正九郎君は思いました。自転車屋の店が見えなくなったところで、ふたりはやや、ほっとしました。

ですけれども、ここでも不幸は、ふたりを待っていました。ほっとしたとたんに、正九郎君は、洗いたてのズボンを、すっかりよごしてしまったことに、気がついたのです。そのうえに加平君までが、やあ公がびわの木を、あらしすきはしなかったかということ、心配したのです。気がついてみれば、加平君のおとうさんは、うさぎでもにわとりでも、平気でしめ殺す、おそろしいお

じさんでした。

ふたりは、水から上がったばかりの子ねのように、しょんぼりつつ立つて、ものがなしそうに夕ぐれを見ていました。もう、ふたりには、いくところがありません。③すべては、終わってしまったのです。

でも、まだ終わってしまったではありません。どうすることもできない、空気入れのことがあります。空気入れは、そのつぎの日も、またそのつぎの日も、正九郎君をおびやかしました。村じゅうの人が、そのことを知っているような気がして、正九郎君は人の **A** を、まっすぐに見ることができませんでした。

先生が、朝礼台にのぼるたびごとに、そのことをいだしはしないかと、**B** をひやすのでした。自転車屋の方へなど、**C** もむけられません。空気入れからにげるためなら、正九郎君は、いつそ煙のように、消えてしまいたいほどだったのです。

けれども、**6**、おそろしいことになってしまいました。あのことがあつてから、一週間ばかりあとのある日の夕方、おかあさんが正九郎君に風品敷をわたして、いったのです。

「自転車屋へいつてな、卵を二十錢、買つといで。」

ついにきたと、正九郎君は思いました。顔からさあつと、血がひくのを感しました。

「清太ンとこじゃいかんの。おつかさん。」

おかあさんは、わざと正九郎君を苦しめているように、いいました。

「あそこの卵は、粒つぶが小さいでそんだよ。」

これがおかあさんの、いつものいいぐさです。

正九郎君はあきらめて、外へ出ていきました。まがり角を三つまがれば、自転車屋であると、正九郎君は思いました。もう、あとふたつだ。もうあとひとつだ。

清太ンとこで買つてきて、おかあさんをごまかしたら、どんなもんだろうと思いました。でも、思つたきりでした。加平君なら、

こんなことを、やれるかもしれない……。

あ、7、最後のまがり角を、まがってしまいました。なにか目に見えないものが、正九郎君を引っばっています。もう、のがれっこはない。

自言しに、交番へはいつていくスリのように、正九郎君は、自転車屋へはいつていきました。どんなに深く、正九郎君は、あきらめていたことでしょう。自転車屋のこわい金さんが、丸太をふりあげて待っていたとしても、正九郎君は、その前に、おとなしくDをさしのべていったにちがいありません。けれども、それにもかかわらず、金さんがいないことがわかったとき、正九郎君は、喜ばずにはられませんでた。

もう、すべてのことはわかっていると思っていたのに、ボロ自転車の^(b)ソウジをしていたやあ公は、正九郎君を見ても、べつになんともいいませんでした。そして、卵のことをきくと、背戸^(まき)へいつて、おばさんに話してきてくれました。正九郎君は勝手がちがつて、へんな気持ちでした。なんかいわれたら、こんなふうにわびようと、道みち、口の中できり返してきた^(ま)哀願のことは、口の中でとまどいするのが感ぜられました。けれども、⁽⁴⁾むしろ、悪いことではありませんでした。

おばさんが、前だれに卵をいれて持ってきました。そして、正九郎君の風呂敷を畳の上にひろげて、そこへ前だれから移しました。いつものおばさんと、すこしも変わりはありません。おばさんも、知らないのです。するとあの空気入れは、どうなったのでしょうか。

正九郎君は、べつだん、見たわけではありません。けれども、はじめから空気入れは、どこにあるかを知っていました。さわってみなくとも、はれもののあるところがわかると同じことです。ところが、正九郎君のそのはれものに、とつぜんあらわれた人が、手をふれたのです。

正九郎君は、あつというひまもありませんでした。樽屋の次郎さんが、つかつかとはいつてきて、

「空気入れ、すまんが貸してや。」

と、いつたかと思うと、空気入れをつかんで、出ていつたのです。正九郎君は、はれものの中に、指をつっこまれたように、ぎよつとしました。なにがなんだか、わからなくなっていました。胸がしきりに、いたみました。耳のあたりで、百も千もの鐘^(かね)が一時にわめきだしたような音がしました。

それは、ほんのちよつとのできごとでしたが、正九郎君には、長い苦しみであつたように思えました。

もし、シューツ、シューツという、空気入れのしつかりした音を聞くことができなかつたら、正九郎君は、どうなつていたでしょう。正九郎君ははじめ、ほんとうとは思えませんでした。じぶんの耳を、信することができませんでした。けれども軒下で空気入れは、力にあふれた声をあげていました。

「シューツ、シューツ。」

それは、がんじょうな男が歯を食いしばつて、その歯のむこうから、ゆつくりいきをおし出すような音でした。

おばさんは、卵をみんな風呂敷へ移すと、最後に小さい卵を、正九郎君の手ににぎらせていうのでした。

「これ、駄賃^(だちん)だよ。いま生んだばかりだから、まだ、ぬくといだら。」

かた手に風呂敷つつみ、かた手に生みたてのほろぬくい卵を持って通りに出ると、正九郎君は、⁽⁵⁾身も心もかるくなつたのを感^(かん)じました。長いあいだいたんだ虫くい歯が、ぽろりとぬけたような気持ちでした。

(新美南吉「空気入れ」より一部改)

(注1) 上がりがまち……座敷への上がり口で、はき物を置く土間の部分と床との段差部に水平に渡した横木のこと。

(注2) 背戸……家の裏口。または裏手のこと。

問一 ＝ (a)・(b) のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 〰 「過失」の対義語を漢字二字で書きなさい。

問三 (X)・(Y) に補うのに最も適当なものを、それぞれ次の中から選びなさい。

- (X)

ア

イ

ウ

エ

やま

たて

よそ

しお
- (Y)

ア

イ

ウ

エ

経験上

金輪際

徹頭徹尾

初志貫徹

問四 次の選択肢の中には 1 　 7 を補う際に、二度使うものが二つある。その二つを選びなさい。

- ア とうとう イ やれやれ ウ すらすら エ ぬらぬら オ わくわく

問五 A 　 D に入る語として最も適当なものを、それぞれ次の中から選びなさい。ただし、同じ記号を二度使っては
いけません。

- | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ア | 手 | イ | 足 | ウ | 頭 | エ | 顔 |
| オ | 首 | カ | 尻 | キ | 胆 | ク | 腹 |

問六 ――①について、この場合の「他人」とはということか。その説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア 相手の心情などに関係なく自分のやりたいように行動し、互いに頑張ったのだという思いすら共有できない、独りよがり
で冷たい人ということ。
- イ ともに計画をたてて実行したのにいつたん事故が起きると責任を一緒に取ろうとはしてくれず、まるでひとごとのように
やるまう人ということ。
- ウ 初めは二人で計画をたてたのに、いたずらが見つかりそうになると、あることないことすべて相手に責任をなすりつけよ
うと考える人ということ。
- エ いたずらを初めから知っていながら、直接手を染めることもなく、事件には自分は一切の関わりがないのだという態度を
崩さない人ということ。

問七 ――②について、この時の「加平君」の心情の説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア やあ公から特に道具のことを聞かれなければ、このままはつきりさせずにすませてしまおう。
- イ パンクの修理で十銭を手に入れたことに話題を向けて、道具のことから話をそらし続けよう。
- ウ 念願だった自転車屋の店番ができたからには、道具のことはあまり気にしないようにしよう。
- エ 親切に自転車屋の店番をさせてくれたやあ公に、道具のことで心配をかけないようにしよう。

問八 — ③について、次のⅠ・Ⅱの問いに答えなさい。

Ⅰ 彼らの心情の説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア 今はごまかせても、自分たちが犯した罪はどうしてもつぐないきれないものなのだというむなしさ。
- イ 夢を達成した喜びに隠された油断が、手に負えない結末をもたらしたのだという自分への怒り。
- ウ ポンプ、びわの実、ズボンなど、失われたものはもう元に戻すことはできないという絶望感。
- エ 真実を伝えるべきか悩みながらもそのまま立ち去り、告白する機会が失われたのだという後悔。

Ⅱ また、このときの彼らの置かれている状況や心情をあらわす語句として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア 二兎を追う者一兎をも得ず
- イ 急がば回れ
- ウ 清水の舞台から飛び降りる
- エ 覆水盆に返らず

問九 — ④の理由として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

- ア 空気入れが今どこにあり、どんな状態なのかという真実を知っているのは自分一人だけだという優越感に由来する満足感がふくらみ、自分を苦しめていた罪の意識を超えることができたから。
- イ 正直に自分の罪をつぐなうことを決心して実際のあやまり方に今まで悩んできたが、おつかいで仕方なく自転車屋に来てみると気軽に謝れるような雰囲気を感じ、安心することができたから。
- ウ おばさんが空気入れについては何も言わず、卵のことしか言わないのを、自分のことを金さんからかばって、あえて話題をさけてくれているのだと考え、彼女の優しさに心がいやされたから。

- エ 罪をどうやってつぐなうか悩んできたのに、自分の犯した罪が店のだれにも気付かれていないことを知って安心するとともに、このままあやまらなくてすみそうだという気持ちになったから。

問十 — ⑤について、それまでの「正九郎君」の心が重かったのは、どのような気持ちからか。五十字以内で答えなさい。

問十一 この文章の表現上の工夫として、適当でないものを次の中から選びなさい。

- ア さまざまな比喩表現を用いることによつて、登場人物の気持ちを効果的に描き出している。
- イ 主に主人公の視点から物語を進めることで、その気持ちとの一体感を読み手に感じさせる。
- ウ ですます調の語り口によつて、語り手が直接、読み手に語りかけるように話を進めている。
- エ 読点を多用することによつて文章のテンポをよくし、場面の転換がスムーズになっている。